

☆最近読んだ本の主人公が戦前の日本ビクターの社員であったことを知る。 2014/1/10 原口敏徳

いつも通っている東大和市の図書館で見つけた本にびっくりする内容がありましたのでご紹介します。新刊に並んでいたノンフィクションでタイトルが面白いので手に取ってみたところ実に興味深い内容のものでした。

内容の概略

タイトルにあるように 8.15 以降も（当然ポツダム宣言受諾、無条件降伏後）進攻してくるソ連軍に対して満州に在住する日本人を守るため、たまたま特攻訓練のため満州にいた隊員と 11 機の飛行機で東京からの指令により逃げた関東軍に反感を持ち上官の命令を無視してソ連部隊に特攻をかけた兵士たちがいたという物語である。

主人公は新婚で特攻の教官、妻は夫の決意を聞き自分も一緒にと願い、隊員の妻・婚約者も同乗して突っ込んだ。

この事実は公式に認められず、当然発表もされてはいない。著者があるきっかけでこの事実を知り、時間をかけたくさんの人々に取材し全貌を明らかにした。

特攻の部分は一番最後に書かれ、主人公とその妻の人となりや戦前の日本人の考え方、日本国の太平洋戦争への突入と敗戦への過程を主人公の行動の背景として時代を追って記述し、本人が「妻と一緒に、8.19 に、満州で特攻」した背景を描いている。

この内容にさえ驚くのに、なんとこの主人公が戦時中のビクター、当時の社名は「日本音響株式会社」の社員であり、青森県の実家は父親が創業した映画館に併設した売り場で昭和 2 年「日本ビクター蓄音機株式会社」と特約店契約を結びビクター製品の販売を行っていたという事実である。そのあたりは本からの抜書きを添付してあります。

ぜひ、この本をお読みにならんことをお奨めします。



書籍名：「妻と飛んだ特攻兵～ 8.19 満州最後の特攻」 著 者：豊田正義 出版社：角川書店

本紙抜粋

下北、旧会津藩士の地

昭和の初期、青森県下北郡田名部町に「稲宝庫」という映画館があった。田畑の中に建てられた木造の広い映画館は、椅子のない棧敷席で、冬場には木炭を焚いた火鉢が棧敷のあちこちに置かれ、観客は火鉢を囲んで暖をとりながら活動写真を楽しんだ。

当時は無声映画からトーキーへの移行期で、映画館はどこも盛況であったが、田名部町の稲宝経も連日満員で、「阪妻」の愛称で一世を風靡した二枚目俳優・阪東妻三郎の新作時代劇などが来ると長蛇の列ができた。

稲宝座の館主は、谷藤松次郎といった。明治二十九年、岩手県盛岡市で生まれた松次郎は、芝居や音楽会などを開催する興行師となり、東北各地を転々とした末に田名部町に定住し、この地で最初の映画館を造ったのである。

さらに松次郎は音楽業界との人脈を活かし、昭和二年にアメリカの大手オーディオ・レコード会社「ビクター・トーキング・マシン・カンパニー」の日本人として設立された「日本ビクター蓄音器株式会社」と提携して、ビクター製品の販売特約店を田名部町で開業した。

日本のレコード事業の黎明期だった当時、日本ビクターは『君恋し』『東京行進曲』『神田小歌』『愛して頂戴』『洒落男』『唐人お吉の唄』等々、多くの流行歌のレコードを世に送り出していた。松次郎は「電蓄」と呼ばれる最新型の電気蓄音器を店頭に置き、ぜんまいを巻いて再生する旧式の蓄音器とは比べ物にならない高音質と大音量で遺行く人々に流行歌を聴かせた。娯楽施設が何もなく田名部町で映画や音楽の魅力を伝えたいという情熱を松次郎は持っていたの

以下省略

東京に戻った徹夫は、日本ビクター蓄音器の後身である。『日本音響株式会社』に入社した。当時、日本ビクターは米国の親会社との資本提携を解消していたが、ビクターという社名が日本政

府に「敵性語」と見なされて変更を命じられ、日本音響という新社名にしたのである。徹夫は東京本社の営業部に配属された。クラシック愛好家の徹夫が馴染み深いビクター製の蓄音器やレコードを販売することに意欲を持っていたのは間違いないだろう。しかし入社後、彼らもつばら軍需工場で働かされた。蓄音器とレコードは「贅沢品」として生産が禁止され、それらの製造工場は軍に接収されて軍需工場となり、仕事がなくなった営業マンは工場労働に駆り出されていたのだ。

当時の大卒者の矜持として「このまま工場労働者で終わってなるものか！」と徹夫は、大奮起した。軍需工場に勤務する傍ら、高等文官司法科試験の合格をめざして法律の勉強を続け、父親の松次郎に「高文に合格するまで帰りません」と誓ったのである。以下省略